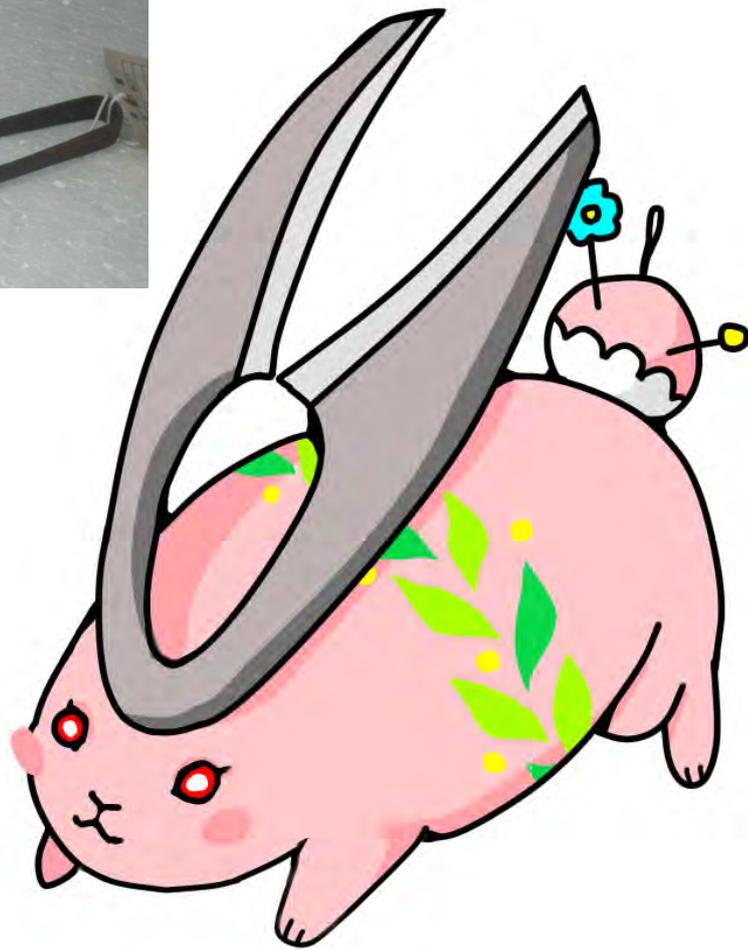


高森町歴史民俗資料館「時の駅」

つくもがみ 「付喪神 (キャラクター) 図鑑」





No.1 因幡和希臘比売命 (いなばのわぎりのひめみこ) 通称「はさびよん」

神代^{かみよ}の昔、シルクロードを通して希臘^{ギリシヤ}からやってきた付喪神様。最初、因幡^{いなば}の国にたどり着き、大国主命^{おおくにぬしのみこと}に助けられた過去を持つ。季節の変わり目に毛が生え変わる時、体に月桂樹^{けいじゆ}の模様が現れる。昔、ワニザメに毛をむしられたことから、日頃はおとなしいがいざとなると耳の鉄^{はさみ}で「輪切り」にする習慣がついた。今では日本でしか見られなくなったが、裁縫^{さいほう}以外にも餠細工^{あめざいく}に協力することがある。



No.2 よろずやなべえもん 万屋 鍋 衛門 通称「なべどん」

げんべいかっせん 源平合戦（源氏と平家の戦い）が行われたころから台所に現れた つくもがみ 付喪神。兄さんは土製だったが、いもの 鋳物鉄の普及とともに東日本を中心に現れるようになった。台所用品全般に あきな 商いをするかたわら、兄さんの子孫たちに かゆ 粥や豆の調理方法を教え、子孫は「ゆきひらなべ 行平塙」「ほうろくなべ 焙烙塙」となって人々に親しまれている。「なべどん」は現在でも東北の いもにかい 芋煮会の主役として引っ張りだこであるが、割れても いかけや 鋳掛屋に治してもらいながら百年以上の命を長らえる者もいる。



ゆだてのはがまのじょう
No.3 湯立羽釜丞 通称「かまのジョー」

古くは湯立等の神事で呪術に使われ付喪神に列せられた。一つ目ににらまれると嘘を言えなくなり、怒ると頭上から火を放つ。茶の湯文化が庶民に広まると茶釜となって普及し、一族の「ぶんぶく茶釜」は昔話に登場する。張り出した鰭を持つ羽釜は、竈と組み合わせられて昭和時代まで活躍したが、台所にエネルギー革命がおよぶとガス釜や電気炊飯器の「内釜」に姿を変え、長く命を保っている。



まどか けんのすけ
No.4 円 硯之介 通称「硯之介」

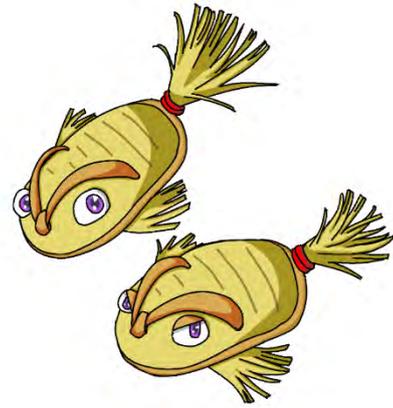
先祖は奈良時代まで^{さかのぼ}るが、日本に文字文化が定着するころから役所を中心に現れるようになった。もとは^{まるい}頭頂^{とうちよう}で^{すみ}墨を^す磨って^{もつみん}木簡（木の短冊）に文字を書いたが、江戸時代になると^{あみ}編み笠^{がさ}の下に顔を^{かく}隠し、刀の代わりに筆をもって権力に立ち向かった。合言葉は「^{けん}剣より^{けん}硯」。近年、硯之介の^{かげむしや}影武者がSNSを使いこなすようになったが、フェイクニュースを流す^{やたら}輩^{やたら}がいて頭を悩ませている。

最近、飯田市座光寺や高森町の遺跡で先祖が発掘され、「^{ふほんせん}富本銭」も見つかりと古代の役所の跡であろうと考えられるようになり、座光寺の^{ごんが}恒川^{いせき}遺跡^{いせき}は国の史跡に指定された。



No.5 鳴り物大将・鈴虎 すずとら 通称「すずとら」

古墳時代、朝鮮半島からやってきた付喪神様。馬につける飾り（馬具）としてやってきたが、都から命令を伝える役人が持つ「馭鈴」や神事で巫女が持つ「神楽鈴」として仲間が増えた。表面に虎（または邪気を払う神）と思しき模様が描かれている。まわりで式神のように飛び回るのは、「鈴猫」たちである。家の中では、西方を守る。



No.6 和良守博敷 わらのかみはくしき 通称「藁じい」

弥生時代の初め頃、稲作で「田植え」が始まるとともに現れた付喪神様。「稲刈り鎌」が発達し、藁が生活道具を作るのに使われるようになって仲間が増えた。モノを入れて運ぶ「俵」や雨具の「蓑」、敷物の「蓐座・蓐」、履物の「草履・草鞋」などに姿を変え、様々な知識・工夫や庶民生活の喜怒哀楽を飲み込んで生きながらえた日本を代表する付喪神様である。最近ではコンバインの導入により稲わらが少なくなってきたが、神事に使われる藁縄や年始を迎える神飾りとして根強く存在している。



アイロンけん ひ の し
No.7 愛論犬「火熨斗丸」 通称「ひのまる」

明治時代に服装の洋装化にともなって登場し、それまでの火熨斗に取って代わった。服のしわを伸ばす器具である。しかし、大正時代に電気アイロン犬が出現すると、次第に姿を消した。形は電気アイロンとほぼ同じだが、炭火を入れるため頭部が大きく高さもあり、開閉できる蓋になっている。怒ると頭部の煙突からガスを出し、相手を威嚇する。名前の「火熨斗丸」はアイロン登場前の伝統を尊重するため。通称の「ひのまる」は日本の象徴にあやかった。



No.8 玄武:「Do Vin(ドウ・ビン)」 通称:そのまま「どびん」

祖先は、縄文時代（約2000年前）までさかのぼるが、江戸時代、煎じ薬や番茶を煎じるようになると北の方位神と合体して再登場する。注ぎ口と蓋、弦がついており、火鉢や囲炉裏の近くでよく見られる。素材は陶製だが、直接火の当たる腹部には釉薬がかかっていない。弦にはアケビヅルなどの蔓類を用いるものが多いが、本体と同じ陶製のものもある。また、蓋には小さな穴があけてあり、これによって噴きこぼれや割れを防ぐ。家の中では、北側を守る。「Do Vin」とは「Vintage（最高級品）になる」の意味。



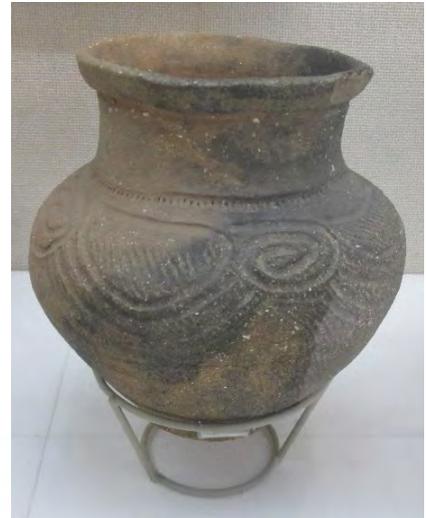
No.9 天土師瓦命 (あめのはじがのみこと)

通称：「瓦竜(がりゅう)」

奈良時代、伊那郡衛^{いなぐんが}建設時に金井原窯^{かないばらかま}で瓦^{かわら}を焼

際、窯の立ち上る煙から生まれた付喪神である。誕生の時、先祖の「信濃天竜(あめのしなののりゅうおう)」から土着神としてこの地域を守るように命を受け、古代伊那郡衛の物資運搬に協力し、戦国時代は現在の松川町・台城^{だいじょう}の周辺で霧^{きり}を吐^はいて城を守ったともいわれている。

平時は穏やかであるが、怒ると未満水^{ひつじまんすい}や三六^{きぶろく}災害のように暴れることもある。背中に背負う瓦状の鱗^{うろこ}は、高森町古瀬遺跡^{こせいせき}から出土した瓦に酷似しており、伊那郡衛と古瀬遺跡との密接な関連が想定される。緑色の眼は水神の象徴で、眼に墨で黒を入れると画面から飛び立ってしまうことから絶対入れてはならない(画竜点睛^{がりゅうてんせい})。



No.10 ツボネエ 通称「オネエ」

今から4500年ほど前から存在したことが、中央道下の増野新切遺跡^{ましの新きりいせき}の発掘で明らかになった。その形から何かを貯めておく器^{うつわ}であったと考えられるが、何を貯めておいたかは定^{さだ}かでない。もし何かの種^{たね}を貯めていたとすれば、「縄文農耕^{じょうもんのうこう}」に道を開く「未知の付喪神^{つくもがみ}」となる。胴部^{どうぶ}の文様は東海地方^{とうかいちほう}の影響とみられるが、マジカルな「微笑^{ほほえ}み」は、「縄文のモナリザ」ともいわれる。つくったのは縄文時代^{じょうもんじだい}の女性と考えられているが、完形のままの出土に作者の祈りの強さを感じさせる付喪神^{つくもがみ}様である。



No.11 **縄文の歌舞姫** 通称「ディーバ」

「ツボネエ」と同じ増野新切遺跡から現れた土製人形の付喪神様である。胸のふくらみから女性と考えられるが、飯田下伊那地方独特の尻の飛び出した形から「尻張り土偶」とも呼ばれる。

首と胴が折れた状態で見つかったが、わざと折って捨てたと考えられる例が多いため、体の具合の悪い所を祈りで人形に移し、捨てることで体から取り去る信仰があったのではないかと考えられている。歌舞と祈りで病を取り去ろうとした縄文人の姿が

想像される。後の女性神「山の神」と共通する点もある。



No.12 富本の芦毛 通称「富銭号」

奈良県明日香村の飛鳥池遺跡で製造された富本銭は、「日本書紀」天武12(683)年4月の記述により「日本最古の製造貨幣」と認識されるようになった。しかし、東日本では現在3枚しか発見されておらず、畿内以外ではそれほど流通しなかった可能性がある。それだけに3枚のうち2枚が高森町の武陵地1号古墳と近接する飯田市座光寺恒川遺跡付近で発見されたことは、この地が天武政権から認められた重要な地域であった証であろう。

その貴重な1枚から生まれたのが「富本の芦毛」である。たてがみは富本銭製造の連銭

の様子を表し、馬体の芦毛が「七曜の星」に見える。これから成長し天翔ける白馬になる姿が想像される。



No.13 みけ とみねこ 三毛の富猫 通称「みけとみ」

古代日本の鑄造貨幣「皇朝十二銭」のうち「和同開珎」から数えて5番目につくられ、弘仁9（818）年から使われたのが「富壽神寶」である。鑄造時は弘仁・貞観時代。桓武天皇から嵯峨天皇の治世で、平安時代前期の文化が確立する時期である。

「みけとみ」は高森町下市田の新井原遺跡から出土した際、出現した付喪神である。

三毛猫の姿を借りて富を民衆に配り与えることを目指して旅をしている。富壽神寶を

編み笠代わりに見一ニヒルに見えるが、心には太平の世を夢見る熱い「志」がある。足の

裏の銭形がチャームポイントである。

-13-



や た て に ゆ う ど う ほ く か い
No.14 矢立入道 墨海 通称「ぼっかい」

墨壺と筆を一つの容器に納めた「矢立」から生まれた付喪神である。墨壺には艾（かわかしたヨモギを繊維状にしたもの）などに墨汁を浸み込ませてあり、漏れないように蓋がついている。鎌倉時代に登場し、江戸時代になって墨壺が大きく丸くなり、腰に差して歩くのに便利になった。容器の素材は黄銅・赤銅など丈夫なものが多く、刀を差せない庶民にとっては、旅中での護身用にもなった。

「ぼっかい」の登場で野外で字や絵をかくことが容易になり、旅にはなくてはならない神となった。

当館に鎮座する「ぼっかい」の中には大きなものもあり、護身用かもしれない。

-14-

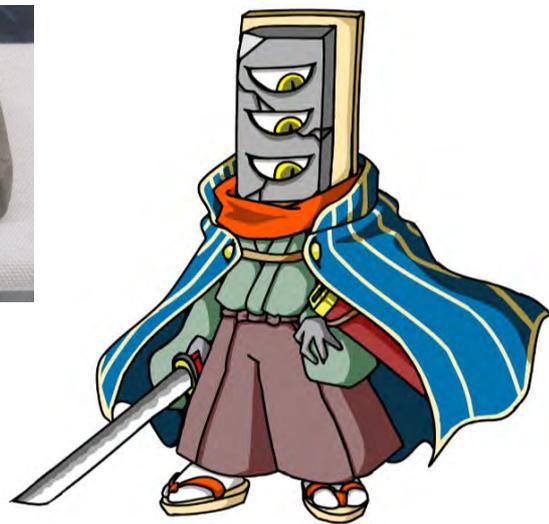


No.15 ^{あわ}粟入り土器棺:かんくろう 通称「かんちゃん」

なくなった人の遺骸を土葬するために納める甕形土器から生まれた付喪神である。甕形土器の出現は縄文時代にまでさかのぼるが、多くは小児や乳幼児を埋葬したものであった。東北地方では、縄文時代後期の成人骨を再納した甕や壺が発掘されている。弥生時代前期末にいたって成人用の大形甕棺が出現する。被葬者に応じた大きさの甕が使い分けされるようになったとみられる。高森町の深山田遺跡から発掘された「3号合わせ口土器棺」は条痕文土器と氷式土器が口を合わせるように埋納されて

いた。同様な土器棺の粘土内にアワやキビが観察されることから、雑穀が周辺で栽培
されていた可能性が高い。底が抜かれていることから「魂」の出入りを意図したものか
もしれない。

-15-



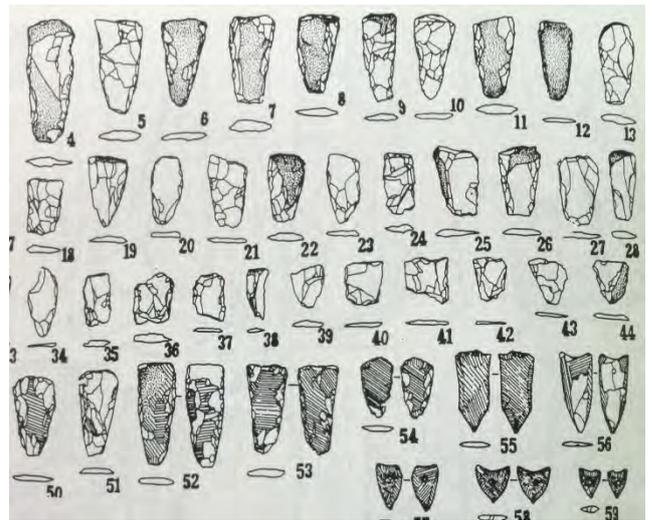
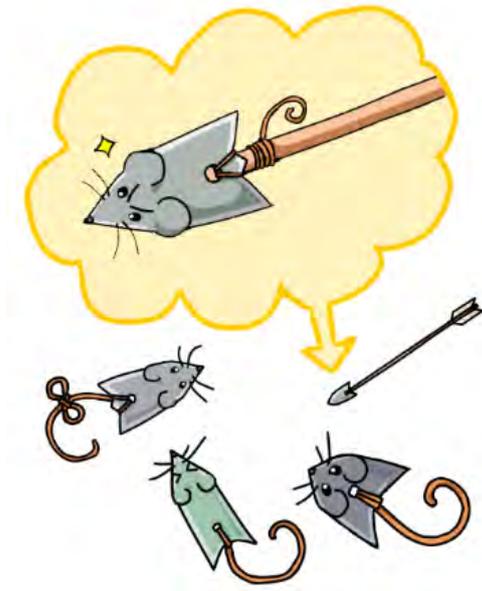
No.16 研ぎ師:研四郎 通称「ケンシロウ」

「砥石」とは、^{もの}を研ぐのに用いる石。日本の刃物は高炭素鋼を使用し、十分に
焼入れをする硬質の刃物で、これを研いで鋭利な刃先を得るには、上質の砥石がな
くてはならない。日本では早くから各地で上質の天然砥石を産出し、それによって日
本の刃物文化が発達したともいえる。堆積岩の一種の水成岩を原料とし、粒子の粗
い荒砥、中間ぐらいの中砥、細かい仕上砥がある。京都の丹波青砥、愛知の名倉
砥、三河白、群馬の沼田砥など、産地名がそのまま品名として広く知られ、流通してい

た。

当館の付喪神「ケンシロウ」は松岡城の発掘調査によって発見され誕生した。松岡城では鉄器や銅器を溶かし修繕する「羽口」とともに発見されたことから、小鍛冶に加え「研ぎ師」もいて、刃物などの修繕を行っていたと考えられる。

-16-



No.17 ^{みが}磨き^{そく}鏃46 通称「マツチュウズ」

「石鏃」とは矢の先に付ける石製の鏃（やじり）で、黒曜石を使い縄文時代から使われているが、当館の付喪神は、弥生中期北原遺跡から出土した磨製石鏃から現れた。

北原遺跡は、高森町出身の考古学者 ^{かみむらとのおる}神村透氏らによる発掘で、製作途中の未製品や砥石が、住居址から大量に発見され、「磨製石鏃の製作址」である可能性が高まった。

北原遺跡の磨製石鏃の特徴は、長軸の長い刃部が直線的なタイプ（大型）と長軸が短い縄文時代の石鏃に近いタイプ（小型）がある。

「大型」は、佐賀県吉野ヶ里遺跡の甕棺内で発見された磨製石鏃に似ており、関係性が注目される。

-17-



No.18 メーツム 通称（そのまま）「メーツム」

繊維に撚りをかけて糸に紡ぐ道具から生まれた付喪神である。糸を巻き取る道具を

紡錘

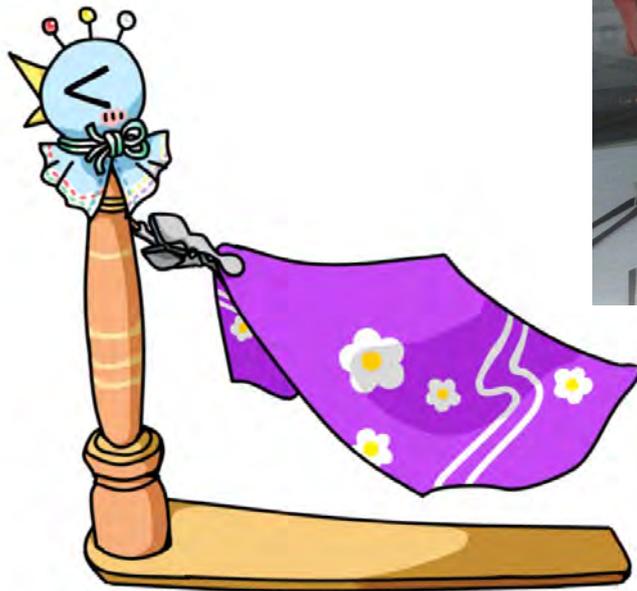
といい、糸を巻き取る際に軸の回転に惰性を与えるはずみ車が紡錘車である。遺跡から

出土

する紡錘車は通常、石製もしくは土製で、直径4～5cm程度の扁平な円形をしており、中央に1孔軸を通すための穴をあけている。土製のものには土器片を加工したものもみられる。このほか木製・鹿骨製のものが知られる。日本では弥生時代になって広く普及したが、縄文時代に存在した可能性もある。古墳時代には石製が多く、文様などが線刻された例もある。また奈良時代以降に鉄製品もあるが、それを軸と一体化したものが、紡錘である。

当館の「メーツム」は羊のような顔をしているが、繊維は羊毛よりも麻・絹・綿を紡ぐことが多かった。

-18-



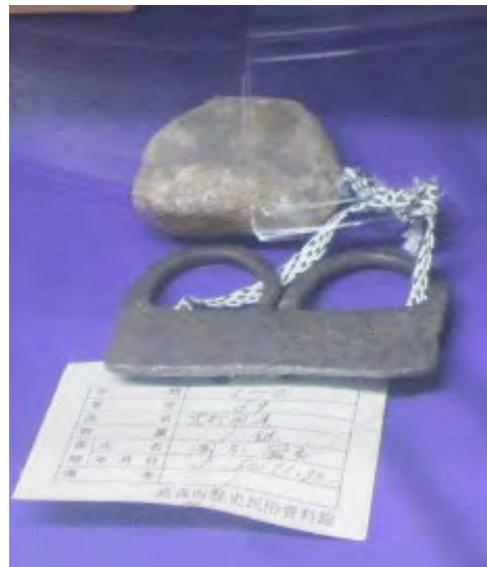
No.19 紡台(くけだい): くけこ 通称(そのまま)「くけこ」

縫い物をするとき、縫い目を揃えて縫うのに用いる裁縫道具を「紡台」という。細

長い板状の台の一端に 棹^{さお}を立て、棹の上に針を刺す 針山^{はりやま}をつけている。針山の少し下に通した掛糸の先につけた留め金具で布の一端を挟み、布を引いて張りながら、縫針を運んで縫う。板台は 膝^{ひざ}の下にして押さえる。立てる棹は折りたたみ式になったものと、差し込み式があり、針箱に差し立てるものもある。

当館の「くけこ」は、針山の針が 鶏^{にわとり}の 鶏冠^{とさか}に見えることから、「くけこ」と名付けられた。留め金具にはさまれる布によって着飾るのが好きで、好みに合わない布がはさまれると針を刺して意地悪をすることもある。

-19-



No.20 ひうちいし ひうちがね はっかぼう かんかん 火打石・火打金：発火坊「侃々」 通称（そのまま）「かんかん」

火打石と火打金は、双方を打ちあわせて火花を出す発火具である。

出土品から、古墳時代にはすでに使われていたことが知られており、室町時代には木

片に火打金を打ち付けたものが商品として普及し、江戸時代にはさまざまな形のものが売られていた。これで得た火花を木屑や木の皮などを用いた火口ほくちに取り、付木つけぎに移して火種ひだねとした。

発火坊「侃々」かんかんは、剛直ごうちよくな性格で曲がったことが嫌きらいな坊さん付喪神である。理屈りくつに合わないことを見聞きするとカンカンに怒りおこ、石頭を火打金にたたきつけてもぐさのひげに火をつける。相手が誰だれであろうと議論ぎろんを吹っ掛けるふっかけるので煙たがられるが、根は優しい爺じいさんである。